其の政悶々たれば、其の民は淳淳たり。其の政察察たれば、其の民は欠欠たり。禍は福の倚る所、福は禍の伏すところ。孰れか其の極を知らん。其れ正無きか。正は復た奇と為り、善は復た妖と為る。人の迷えるや、其の日固より久し。是を以て聖人は、方なるも而も割かず、廉なるも而も傷わず、直なるも而も肆ずず、光あるも而も燿かず。

【大体の意味内容】政治の行われ方がおおらかで、対立する立ち場の境界をあいまいにぼかすようなものであれば、人民も、大きな器に満たされた水のように融合しあい、主義主張の違いを超えて和解する。政治理念や主義主張が、きっぱりしすぎた形で行われると、それによって人民のイデオロギー闘争も激しくなり、ぎくしゃくした社会となってしまう。　たとえて言えば、災禍とは幸福が寄り添うところであり、幸福にはその陰に災禍が伏し隠れているものだ。この両者は互いに原因であり結果でもあるような循環をなし、その極致となるような原因とか結果とかを、特定できるものではない。この世に絶対の正義などというものがないのと同様である。正義正行はまた奇策奇行ともなり、善意はまた妖気ともなる。（つまり物事のプラス面とマイナス面ははっきり区別がつくことはなく、おおらかに溶け合っているのである。）　人間とは迷いつつ生きる者であり、その歴史はもとより久しく続いている。それゆえに「聖人」は、品行方正でありつつも、邪まな者との関係を断ち切ることなく、穢れを扱いながらも己の廉潔を傷なわない。まっすぐな意志を抱くも、しかしその高邁さを人に見せつけることなく、大智大光を身に帯するも、しかし耳目

を集(あつ)める燿(かがや)きを放(はな)ちはしない。

』